

研究発表要旨

## The Picture of Dorian Gray のラスト・

### シーンをめぐって

浦部尚志

(青山学院大学大学院博士後期課程)

19世紀 Victoria 朝英国は、広大な植民地と近代的な工場による繁栄を背景として、世界の富を手中に収めていた。そして、あくなき物質文明追求の理論武装として、Puritanism の要素を最大限利用した。このような偽善的な功利主義的価値観に当時の代表的な作家は皆一応に反発していった。彼らはこの社会の風潮を正そうとして、人間としての正しい在り方を教えようとした。しかし、彼らの俗物たちに対する攻撃は生温かった。少なくとも Wilde を初めとする唯美主義者たちにとってはそう映った。そして Wilde らが標榜する唯美主義とは、ある意味で、こういった浅薄な Victorianism への痛烈な対抗意識だったのである。

Wilde は *Dorian Gray* の中でも当然、反功利主義的精神を唱えた。だが、その中で、ただ一つ重要な落とし穴が存在していた。それは、この作品におけるラスト・シーンの不可解さである。Wilde は自らの芸術論の中で、「芸術作品は全て非道徳的でなければならない」と宣言した。だが、この場面には、明らかに教訓的なプロットが見て取れる。

Dorian は、自分の汚れた魂を象徴し、醜く変化する肖像画に、次第に耐えられなくなっていった。そのため画像をナイフで突き刺すが、不思議なことに、彼は逆に自分の命を落とす結果となる。Dorian は報いを受けて死んでいくのである。しかも、その姿は、生前彼が最も忌み嫌った老醜の様相を呈している。ここから、勧善懲悪と因果応報の様式が見てとれる。つまり、Victoria 朝社会が好む、「善悪を岐別し、悪を退けようとする」世界が現出しているわけである。道徳の役に立ってはいらない筈の芸術が、役に立つものになってしまっていると考えられる。また、そのことを裏づけるように Wilde 自身、「この作品には恐ろしい程の moral が含まれているのだ」と語っている。ところが、Wilde は、この小説の preface では、「道徳的な作品だとか不道徳な作品だとかいうものは存在しない。作品は巧みに書かれているか否か、ただそれだけである」とも語っている。一体、これらの言動の矛盾はどう解釈されるべきなのだろうか？

以上の命題に対して、本発表では、まず moral の面からの考察を行った。そして、唯

美主義を標榜していた Wilde が、いかにこの作品の中で「美」と「道徳」を対峙させていったかを検討した。そして、様々な批評家たちの意見を考察するうちに、やはり、Wilde は、既成の道徳観念に負けてこのラスト・シーンを作り上げてしまったのだという解釈が、大勢を占めていることが判明した。

それでも私は、それらの様々な moralistic な解釈に全面的にはないが、反対する。確かに Wilde には罪の意識があり、Dorian の「人生」を破滅的に描いた。moral も十分に意識していた。ここまではよい。しかし、大部分の批評家は、この作品のラスト・シーンにおける、肝心の肖像画が、元の「えもいえぬ美と青春の姿」を取り戻す、という事実を無視していると思われる。

肖像画は、この小説の大部分において、あまり目立たない存在である。しかし、それだけに、この作品を解釈する「鍵」は肖像画の方にあると考えられる。また、Wilde はあまりにもさりげなく、この肖像画の「復活」を描いた。このさりげなさのために読者は、肖像画が美しい姿を取り戻すという「奇跡」にばかり目がいってしまうのである。私は、これこそ Wilde の「策略」だと主張する。

Wilde は、既存の道徳観念に迎合するふりをして、わざと「道徳」を全面に押し出すようなラストにしたのであろう。だが、実は、彼の言いたかったことは、さりげなく書いたほうにあった。彼の言いたかったことは「芸術の復活」であった。芸術至上主義を日頃から標榜していた彼が「芸術や美の敗北」を描くとは考えられない。Wilde は肖像画の美の復活によって、はっきりと「芸術の勝利」を描いて見せたのである。

また、唯美主義の目的のひとつとして、絵画や他の芸術と同様に、一個の文学作品が生じさせる形式的な美を通じて、それを見る人々に感覚的な喜びを与えるということがある。このことを考慮すれば、Wilde がこのラスト・シーンで伝えたかったことは、その内容だけである筈はない。それによって醸し出される悲劇的な「美」の感覚や、究極的には、各種の悲劇がその最終場面において醸し出す芸術的要素や、退廃派の作品に特徴的な final thrill (frisson Nouveau) なども彼の伝えたかったことであるにちがいない。

以上のように、Wilde が、この小説において一番強調したかったことは、「芸術と美の至高性」であったことは明白である。しかし彼は、実際には、「道徳」に固執してしまったことは否めない。それは Victoria 朝英国に生きた作家なら、決して逃れることの出来ない宿命でもあった。しかし、彼が本当に表現したかったもの、それはやはり、唯美主義の精神そのものであったのだ。